期待の若手シリーズ

私にも言わせて！

第92回

故郷の行政医となって

平成31年春から故郷宮崎市の保健所に勤務しています。長く臨床医として過ごし、ご縁があって現職に就きました。戸惑いながらも、少しずつ行政医としての経験を積ませていただいていた中発生した、新型コロナウイルス感染の拡大。日々情勢は変化しています。何ができるのか自分の役割を模索する日々です。

新型コロナウイルス感染拡大

入職1年目、中国武漢から始まった新型コロナウイルス感染症は、わずか数か月で世界各国に広がり、3月11日にWHOがパンデミックという認識を示しました。その後、オーバーシュートを起こした欧州各国は都市を封鎖し、強制的な外出禁止の措置や店舗閉鎖など強硬な措置を取らざるを得なくなっています。国内では、1月16日に初めての患者が報告され、2月1日には指定感染症に指定されました。徐々に患者数が増加する中、ついに東京都や都市圏での感染拡大が起こり始め、日本もその瀬戸際の状況となっています。この原稿が発行されるころには、新たな局面となっていることでしょう。いまや世界中が、このウイルスとの戦闘態勢にあります。宮崎市は、3月4日に1例目が発生、保健所は日々最前線で感染拡大防止の任務を担っています。

今回の原稿の話をいただいたとき、若手でない上、行政医としてもごく新米で、まだこれといった仕事もできておらず、ご活躍の先生方に何か語ることも大変気が引けましたが、「ご自由に」という言葉に甘え、執筆させていただくことになりました。

今はまさに、新たな感染症対応のさなかにありますが、これまでの時間を振り返り、今、これからを考えてみることにしました。

医師としてのこれまで

宮崎の高校を卒業後、山口大学に進学しました。山口は三方を海に囲まれ、魚が本当においしく、秋には黄金色の棚田を真っ赤な彼岸花が縁取ります。そんな自然に恵まれた山口県で大学卒業後は、勤務医として過ごしました。

勤務先では放射線科に入局し、主に画像診断をしていました。一般病院に出てからは、膨大な量の写真を、目薬差しながら読影していました。外科や内科とのカンファレンスにも参加し、広く疾患を知ることができました。

その後約15年は、リハビリ病院に勤務し、画像診断とともに、子どもの療育や高齢者の療養に携わりました。ここでの患者さんやそのご家族との出会いは、今の私の考え方に大きく影響したと思います。

発達外来では、感覚や認知面で少数派の子どもたちを多く診ました。不安で診察室に入れない子やいっときもじっとできない子。外来で出会った子どもたちは、純粋で、独特の感覚世界を持っていました。多数派の人に便利に作られている社会の中で、少数派の彼らは不安や困り事を抱えながらも、折り合おうと健気に頑張っていました。多くの人にとって容易な何でもないことも、人によっては大変だったり、我慢できないものであったりします。反対にとても大事なものだったりします。動く子には動く理由があって、それを頭ごなしに責めるのは、とても酷なことでした。

人は、それぞれ意識せずに自分のフィルターを通してものを見ています。自分が見ているものと、人が見ているものは違います。自分が当たり前に思っていることの多くは、誰かにとっては当たり前ではないことかもしれないこと。周りの大人が窮屈にならずおおらかでいると、どの子どもにも成長という明るい方向へ進んでいく力があること。心を柔らかくして、相手を否定せずにいると、お互いに寄り添える穏やかな着地点があること。寛容で包容力のある社会は、誰にとっても居心地の良い社会となると思います。

子どもやそのご家族との出会いは、医療だけでなく、教育や社会のことを考えさせてくれるとても貴重な経験となりました。

故郷宮崎に帰り、行政医となって

行政の話をいただいた時は、これまで考えたことがなく、イメージが湧きませんでしたが、いろいろな子どもたちのことや、高齢者医療の現場を知っている人が役所にいるのもいいかな、と思いました。素人の状態で（すみません）入職し、なじみのない法令や議会対応など、実のところまだかなり戸惑っていますが、新たな世界を知ってよかったとも思います。これまでほとんど意識していなかった法律や最近のSDGsなど「素晴らしいなあ」といまさらですが、「日本に生まれてよかった」とも感じました。

また、保健師さんたちはとても献身的で、精神、母子、難病など、瀬戸際で生活している方々に寄り添い、地道に根気強く支援してくれています。訪問で伺った障害のあるお母さんは、保健師さんたちの支援を受けながら実に平和に子育てをされていました。こうした努力は、社会の中で大変な環境や状態にある方たちを支える確かな力になっていると感じました。

今、そしてこれから

いまや世界的な感染拡大となっている新型コロナウイルス感染症。東京オリンピック・パラリンピックの延期も決まりましたが、それだけでは収まりません。日々深刻な状況が報道され、保健所には多くの相談の電話がかかっています。疫学調査、病院調整、PCR検査、検体搬送など、日々目まぐるしく過ぎています。

医療機関など関係機関の情報を把握し、うまく流れを作っていくことは行政としてとても重要ですが、実際は大変なエネルギーのいる難しいことでもあります。自分に何ができるのか、迷いながらの日々ですが、所長や奔走している職員の皆さんと、地域にとってのより良い方向を見つけようとするプロセスの中にいることは大きな経験と捉え、周りの皆さんの力を借りながら、未来を見据え諦めずにやっていきたいと思います。

振り返ると医師になって30年が過ぎました。いろいろな事情を抱えた多くの人々を思い、一日一日を大切に、専門職として適切な助言や方向性が示せるよう真摯（しんし）に努力していきたいと思います。

最後に、各地で奮闘されている先生方、職員の方々、どうぞご自愛ください。

今後ともご指導をよろしくお願いいたします。

宮崎市健康管理部
医監
副島 京子

宮崎県出身。昭和62年山口大学医学部卒業、放射線科専門医。平成18年山口リハビリテーション病院勤務。31年より現職。

「期待の若手シリーズ　私にも言わせて！」は、
全国保健所長会ホームページに
バックナンバーが掲載されています。

全国保健所長会　月刊公衆衛生情報　で検索してください

http://www.phcd.jp/update/archive_02_j_koushueisei_watashi.html